

あんげろす

キュウリ

この夏も庭の畑にキュウリが出来た。何百本収穫したことだろうか。来る日も来る日もキュウリを食べた。ヌカ漬けや塩もみにして、生のまま味噌をつけて。体が青くなるのではないかと心配になった程食べた。しかし妻も私も飽きるということがほとんど無かった。日毎に美味しかったからである。美味の奥行は測り知れない。そういう経験は言葉になり難いし、言葉にすれば「美味しい！」という感嘆の一語で尽きてしまう。だが、神秘的な衝撃の記憶は後に残る。それは私と対象との関わりのなかで生れる経験知である。だから生物学や植物学の教えてくれるたぐいのキュウリとは異なる。客観的な事象に主観を混じえてはならぬ、という態度から生れる実証的知識などではない。けれども私には、食味の経験を通じて知るキュウリの方がずっと確かなキュウリである。自分にとって測り知れない何かが相手の内に秘んでいるということ。そこで相手は「他者」となる。他者として認知することは、あらゆる知識把握の根底ではなからうか。

柴田 有

